

草津市立矢倉小学校通信 令和元年 12 月 20 日 NO.15



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

お願いするということ あらたまるということ

男の子がお母さんの手を引いてお地蔵さんにお参りしていた。その後ろ姿がやっと見えるくらい夕闇の中から、二人の声が聞こえてくる。「早く、早く。」男の子の声は大きく明るく澄んでいた。お母さんは、「はい、はい……。」となだめているようだった。そうこうするうち、パチパチとかしわ手を打つ音が聞こえてきたかと思うと、男の子の声が一層大きくこだました。

「サンタさんからプレゼントもらえますように。」

続けてこんな強い口調も聞こえてきた。

「ママ！！ちゃんとお願ひした?!」

お母さんの何やら言い聞かせる声は、いよいよ小さくなった。人目を気にされていたのだろうか。しかし、男の子の後ろでじっと手を合わせておられるお母さんの姿から、きっと大切なことを祈り、わが子に語られるのだろうと思いを巡らした。親子二人にとって特別なひとときである。

子どもにとっては、お地蔵さんはサンタと仲よしで、自分のお願ひを伝えてくれるすごい人、母親にとっては、願ひを受けとめてほしい方なのである。気ぜわしい年の瀬に、ほっこりとする一幕を頂いたようでうれしくなった。

私が子どもだった頃も、年の瀬ならではの、常日頃とちがうものを感じさせてくれるひとときがあった。大人たちはサンタクロースや神さま、正月さまを持ち出して、この時期にしか言えないことを、私たち子どもに語って聞かせていたのである。

「勉強でも、約束したことで、しないといけないのに、せずに放っておいたことはないか。それが何かは自分がよく知っているはず。今からでも遅くない。少しでもいいから取りかかりなさい。そうすれば、どれだけイヤなことであっても、今ではちゃんと正直に反省してやっているということになる。こうして人はあらたまり、よくなっていけるのだ。そのようすを神さまや、サンタさんや正月さまも、ちゃんと見ていてくださる。願うというのは、そういう『心根（こころね）』でいいものを『かう』ということだ。ほんとうにごほうびが頂けるかどうかはわからない。けれど、ごほうび欲しさでガンバルのでは、まだわかってないと言われてしまうだろう。だから、とにかく自分の根（ね）をちゃんとしておかないと。」

大人たちの語りは、きまってこんなふうだった。子どもとしては、「自分がよく知っているはず」という言葉にドキリとし、神さまはすべてお見通しなのだと思えていた。

「いつも自分は神さまに見てもらっている。うれしいけれど、きびしいような、でも正直にやれるだけのことをしよう。そうしていたら、きっといいことがある。」

新しい年を迎える。願ひ、あらたまるということ、それがどのようなものなのか、そのことについて語りやすい場は用意されている。語り合う中で、それぞれにあらたまっていきたい。

校長 大林 道範